彦根市総合教育会議　会議録要旨

令和３年度第３回彦根市総合教育会議	
日　時	令和３年11月２日（火）　午後２時30分～午後４時30分
場　所	彦根市役所４階　特別応接室
出　席	彦根市長　和田　裕行 教育長　西嶋　良年 教育長職務代理者　本田　啓子 委　員　小松　照明 委　員　永濵　隆 委　員　田附　孝子
欠　席	なし
議事次第 １　議題 (1)　全国学力・学習状況調査の結果を受けて (2)　令和４年度予算について	

○企画課長

皆様、こんにちは。

お忙しい中ご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまから令和３年度第３回総合教育会議を開催させていただきます。

本日の進行を務めさせていただきます企画課長の馬場です。どうぞよろしくお願いします。

総合教育会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により設置しているもので、本日の総合教育会議は公開により開催いたします。

本日は、次第に従いまして意見交換をしていただく予定としております。1時間を目途に休憩の時間を取り、また遅くとも16時半までに終了させていただきたいと思いますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

つづきまして、本日お配りしています資料につきまして、確認をお願いします。まず、次第、資料１として「令和３年度全国学力・学習状況調査結果について」、資料２として、「令和４年度教育委員会事務局予算編成方針」になります。不足等はございませんか。

それでは議事の方に入らせていただきます。

次第(1)「全国学力・学習状況調査の結果を受けて」について説明させていただきます。

○学校教育課長

今年度の全国学力・学習状況調査について報告いたします。

令和３年５月27日（木）に、小学校６年生、中学校３年生の全児童・生徒を対象として実施されました。

調査項目は、児童生徒に、国語、算数・数学の教科に関する調査が行われ、学習意欲、学習方法等について、質問紙として調査が行われました。

スクリーンにも出させていただいておりますが、これは彦根市の小学校および中学校の調査結果の概要です。お手元の資料にもありますが同じものです。

テストで測ることができる「認知能力」、なかなか可視化しにくい「非認知能力」を含めた学力をレーダーチャートに表したものです。

左のレーダーチャートが小学校、右が中学校の状況です。「国語」「算数・数学」のところが認知能力を表し、その他の５つの観点が「非認知能力」になります。これらの力を総合的に高めていくことで、子どもたちの学ぶ力が更に向上すると考えています。

またグラフは、青い線が全国平均であり、赤い線が彦根市の結果です。

まず小学校ですが、おおむね全国と同程度の結果となりましたが、算数への関心が、全国をやや下回りましたが、規範意識や生活習慣・学習習慣については、全国をやや上回りました。

次に中学校ですが、教科の結果については全国と同程度の結果ですが、一方で「国語への関心」や「規範意識」等、非認知能力の面で全国をやや下回る結果となりました。

次に国語に関する調査の全体的な傾向ですが、平均正答率は、小学校・中学校ともに全国を下回りました。数字の大小について、大きくではございませんが、小学校の国語では3%程度、中学校の国語では2%未満の差がございました。これは調査問題の問題数から言いますと、小学校では0.5問、中学校では0.2問の差ということになります。

次に、算数・数学にまいります。

全体的な傾向ですが、平均正答率は、小中学校ともに、全国を下回りました。国語と同様に数字で見ますと、小学校の算数では2%程度、中学校の数学では2%未満の差ということで、問題数で見ますと、小学校で0.3問、中学校で0.2問の差という状況でございました。

領域別に見ますと、小学校では、すべての領域で全国平均を下回りました。中学校では、「資料の活用」の領域では全国と同じでしたが、「数と式」「図形」「関数」の領域で全国平均を下回るという結果でした。

次に、教科に関する調査と質問紙調査とのクロス集計を行いました。

「授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」や「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりする」、「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは、勉強の役に立つ」という質問に肯定的に回答している子どもは、教科の正答率が高いという明らかな結果でした。

また、「自分にはよいところがある」と自己肯定感が高い子どもにつきましては、教科の

正答率も同様に高いという結果も併せて見ることができました。

次に、これからの時代を生きる上で重要な「非認知能力」を子どもたちに育むことを目指して策定しました、「彦根教育学びの提言　プラス　ひこねっこ　こころそだての６か条」の「井伊直弼」の視点で児童生徒質問紙を分析しました。

まず「井伊直弼」の「い」、「いいんだよ、ありのままで！」に関わりまして、「自分には、よいところがあると思いますか」では、小中学校とも 70%以上の子どもが肯定的に回答しました。

また、次の「い」、「一歩ふみだして　やってみよう！」に関わり、「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」では、小学校では 70%、中学校では 60%程度が肯定的に回答しました。

次に、「な」、「なぜ？どうして？は　学びのチャンス☆」に関わり、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」では、小中学校ともに 80%程度が肯定的に回答しました。

また、「お」、「思いやりの心で　つながろう！」に関わり、「人が困っているときは、進んで助けていますか」では、小中学校ともに 80%程度の子どもが肯定的に回答しています。

次に、「す」、「少しのがまん　自分のために☆」に関わっては、携帯電話やスマートフォンについて、時には我慢も必要なことに気付かせながら、節度ある使い方ができる力を育んでいきたいものだと考えています。

最後に、「け」、「元気にチャレンジ　夢に向かって☆」に関り、「将来の夢や目標を持っていますか」では、小学校では肯定的な回答が全国平均と同程度、中学校では 60%程度が肯定的に回答しています。

なお、この調査に関わり、児童生徒、個々への結果の返却につきましては、「保護者懇談会」の場で渡したり、「保護者あて文書」を付けて児童生徒に渡すなど、家庭との連携、協力が得られるような形をとるようにと定例校長会でも指示をさせて頂きまして、返却するように努めているところです。

以上、全国学力・学習状況調査についての説明とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○企画課長

ありがとうございました。ただいまの「全国学力・学習状況調査の結果を受けて」に関して、御意見等ございましたら、お願いいたします。

○本田委員

10 月 27 日に県教育委員会の教育長とそれぞれの担当の方との懇談会がありまして、その時に出た話を皆様に紹介したいと思います。議会でも質問があったようですが、県の教育長は、全教科が 7 年連続全国平均を下回ったことについては、非常に重く受けとめている

というお話をされていました。改善を図れるよう市町教育委員会と一緒にしっかりと取り組んでいきたいとも話されていました。

結果の分析をもとに教員向けの授業改善をするために動画も配信されているようです。私はまだ中身は見ていませんが、様々な反省のもと、授業改善に向けた方向で取り組んでいるとおっしゃっていました。

また、他市町の教育長からの意見として、「経済と学力の関係というのは非常にあるように思う」という話をされ、その中で大分格差が生まれているのではないだろうかと。他には、人との関わり、地域やＰＴＡ、家庭等、そういう関わりが学力を高めるのに一役担っているという話も出ていました。また、孤立しやすい家庭があるので、そういう家庭を支援するよう県ぐるみ、市ぐるみで家庭支援を十分にやれるといいという話も出ていました。更に、学校の体制として専科教員や教科担任制や少人数指導等ができる体制も大事だという話が出ていました。

県内の他の市町も学力向上について大変努力されているようですが、行き詰まっているという感じがあることもおっしゃっていました。もっと詳細に分析して検討して、どういうことを改革していかなければいけないのか明らかにしていきたいということをおっしゃる教育長さんもいらっしゃいました。すべての学力が測れるものではないけれども、子どもたちのモチベーションを高めるためにも子どもたち一人ひとりに合った指導計画を充実させていくべきだという話も出ていました。

○小松委員

今回の結果を見て、どうしても正答率の数字に目が行きますが、全国や滋賀県との比較で、私が特にショックだったのは、今年度は滋賀県の小学校の国語というのは全国最下位です。

滋賀県と彦根市を見ますと、この国語についても若干は彦根市が良かったのかもしれませんがほぼ最下位に近いと思っています。

これは生徒の持っている能力というよりも、テストに対する先生の指導の仕方に問題があるのではないかと私は思っています。すなわち、この学力テストということに対して求めている能力を引き出す教え方になっていないのではないかという問題です。毎年そういう結果を見ての検討会の時に思っています。

先ほど課長から説明がありましたが、それぞれの全国平均に対する差が 0.2 問や 0.3 問と言っていますが、9 月 1 日に読売新聞が全国の順位を載せており、平均正答率から見たら全国が 64.3 で滋賀県は 61 で最下位です。この 3.3 ポイントの差というのはかなり大きな差だとまずは認識しないといけないと思います。先ほどの説明を聞いていたら、あんまり大した差はありませんというように聞こえて仕方ありません。

何のためにこの会議をしているかと思うと、この点数レベルを全国平均に持っていくためだと私は思っています。

そういうことから言うと、私は 3 点ほど思うところがあります。

1点目は、彦根市内の学校間での差というものはあると思います。こういうことはあまりオープンにされていなくてわかりませんが、下位の学校の点数を上げることが重要だと思います。下位の学校の問題点は何か、彦根市の中には全国平均を上回る学校もあると思いますが、そこをより上げるのかという学校の先生の意識の問題もあると思います。

2点目は、私はもう県に頼っていても駄目だと思います。先ほど言いました「7年間全国平均を下回っていることを重く受けとめる」と、これは県の教育長が 7 年間も言い続けています。県は2019年から2021年まで読解力育成ということで、もう3年間活動していますが、3年間活動した結果が全国最下位で、教育長の言い訳は「読解力が足らなかった」と言っています。私はそんな話はないと思います。私が思うのは、以前に彦根市独自の学力テストをやっていたと思いますが、そういった行動を考えなくてはいけないと思います。県のいうことをやっても私は絶対上がらないと思っています。

先ほど本田先生がどうやって学力向上をすれば良いかといった話がありましたが、学力向上と点数が一緒だったと仮定すると、県の学力の点数の上がらない理由は県のトップに意識がないからです。すなわち三日月知事はこの学力テストの点数を上げようという意識がないです。ですから、県の教育長も、点数を上げようという意識がないと思います。だから毎年最下位なのです。やはり点数を上げるということへのこだわりが必要かと思います。ですから彦根市は以前実施していた独自の学力テストをもう 1 回見直すべきではないかというのが二つ目です。

それと3点目は、私は学校の先生方の現場の危機感というものがないと思います。「今あなた方が教えている生徒は、全国でも下の方になっていますよ」という危機感です。今の説明のように「全国に比べて0.2とかしか違いません」と言ったら、先生方もそんなに何も思わないと思います。そういうことから言ったら、指導の仕方に問題があるという危機感を絶対持ってもらわないといけないと思います。

これは毎年言っていますが、そういう思いが現場の先生に伝わっているのかなと思います。だから、学校教育課は今回の結果に対して何かそういう甘い捉え方しかしていないのかなと、学校現場に対しての発信というものが、それは飽くまで点数を上げるとすればの話です。彦根の教育はもう点数にはこだわらないというのであれば、それならそれで私はいいと思います。

ただ、毎年点数が悪い事の言い訳しているのであれば、徹底して上げる方法を考えないといけないと思います。何を目標にこの会議をするのかということについてもはっきりしないといけないと思います。

すみません。私の言いたいことを言わせて頂きました

○永濵委員

私も意見を言っていいのかしれませんが、せっかくの会議ですので、この議題の大前提として、新市長がこの全国学力・学習状況調査について、どのように思っておられるのか、思

いや期待があるのであれば、まず市長からそこを一言お聞きして、そこから始めないとこの会議としては進んでいかないと思いますので、まずは市長、お願いいたします。

○市長

はい。ありがとうございます。

私は、学力・学習状況調査の点数について、語弊があるといけませんが、絶対に数字としても上げなくてはいけない、結果的に上がらなくてはいけないと思っています。もちろんこの数字を上げるためだけ、テクニックで上げるということではなくて、総合的に学力をつけた結果的として、これは上げなくてはいけないと強く思っているので、その方向で進めさせていただきたいと思います。

実は、言おうと思ったことも全部小松委員がおっしゃってくださいまして、こちらにいて言うのも何ですが、このグラフもまやかしだと思います。そんなに差がはっきりわからないです。数字での標記ならわかると思いますが、何かこのぐらいだったら誤差で許されるというような見方ができるようなグラフに正直なっていると思います。この 0. 何ポイント差が非常に大きいわけで、ですからこの議論をするわけなので、誤差で見逃さないでしっかりと取り組んでいきたいと思います。

あともう 1 点、小松委員にご指摘いただいたように、結果の中で公表できないデータであっても、例えば学校間に実は非常に大きい差があるのであれば、その学校の国語には手を入れなくてはいけない等、当然この対策として必要になってきますので、一つの学校を除いたら実は平均だったということも十分考えられます。そういう分析をしないと対策というのは取れないので、学校別の対策も必要だと思います。

ただ永濵委員がおっしゃっていただいたようにまず私は今回、皆さんと議論しながら教育大綱を作った上で、最終的にはこの学力テスト、これはちょっと議会でも「学力テストぐらい」というような言い方をして怒られたのですが、総合的に学力を付けて、学力テストも結果として上がってほしい、当然国語・算数・数学だけが学問ではありませんし、スポーツの分野・芸術の分野でも羽ばたいていただく子どもになれるよう子育てをしたいと思います。様々なことにチャレンジできる彦根市であって欲しいなと思いますので、その方向で皆さんご議論いただきたいと思います。

あと、先ほどの井伊直弼のところで、例えば「い」の部分で小学校の「自分にはいいところがあると思う」が全国平均を小学校で上回っていたのに、中学校に入ったら全国、さらに県よりも下に一気に萎縮してしまっている状況ですし、もう 1 つ同じように、最後の「け」もやはり全国平均を上回って、将来の夢や目標等、心のあり方の分野ですが、「将来の夢や目標を持っている」が全国平均を上回っているのに、中学校では現実的になっているというか、何か彦根市の中学校の教育の仕方で、これほど全国を上回っているものが全国を下回るというのは何かあるのかなと思いますので、何らかの対策がいるかなと思います。また引き続き研究したいと思います。

○永濵委員

ありがとうございます。市長がそういう調査の結果を上げるべきだということを前提にお話しさせていただければ、小松委員も本田委員も言われる意見、これは県の報告も含めてですが、私が教育委員会の委員にならせていただいてから、もう何年も毎年同じようなことを言い続けておられます。今までから、ある程度議論は尽くされています。ただそれが現場に反映されているかどうか、どのようにどこまで反映されているのか、どういう形で反映されているのかが私たちには見えません。

私が気づいた部分を、数点、あくまで一部言わせていただくとすれば、小松委員が言われましたテストに対する指導の仕方・教え方という点に関してですが、小学校 6 年生と中学校 3 年生で試験をしますが、小 6 と中 3 だけ頑張っていればいいわけではなくて、勉強というものは経験上、それぞれの 1 年生からの積み重ねです。そうなりますと、やはりすべての教職員、何年生の担任であろうが関係なく、また教えていないような教務担任等も、これは教育委員会の中でも議論・意見が出ていましたが、すべての教職員が、教育委員会にいる先生方も含めてすべての教職員が問題を解くことが必要ではないか、中学校でも専門科というのは教師は分かれていますが、それでもたとえ美術の先生でも数学・国語を解く、ある年だったら英語を解く等そういうことによって、すべての教員が協力していく体制というか意識を持たないと、私は無理なのではないかと思います。結果を出そうと思えば、小学校 1 年生から始まっています。

これは現場の先生方がどこまで意識を持っておられるかなんです。たびたび「教職員全員が問題を解かれていますか」と尋ねることも何回かありましたが「指導はしています」という感じのお答えはいただきました。しかし「やっています」と、「テスト時間を設けてこの日の何時から何時までやります」という全員がやっているという明確な答えを聞いたことがありません。

そこはトップの市長が結果を上げると、もしくは西嶋教育長も結果を上げるとおっしゃるのであれば、それなりに今までと違った体制をとっていかないと、教職員に意識を持たせないと、今までのままだったら無理だと思います。この 5 年 6 年、見せていただいての私の感想です。

県が今年そういう動画を作られたとは、私初めて聞きましたけど、内容がどういうものかわかりません。でも、一時は小松委員が言われているように試験の結果だけがすべてではないという逃げ文句を言っておられる時代もありました。それに対して私たちは「何のために現場の先生に頑張ってもらっているのか」と怒っていました。ですから、その年その年、教育委員会の中でも相当議論がされてきました。そういう先生方の意識がまず一つです。具体的には問題を解かないと、まず解いてどういうことを教えないといけないかということを実感していただかないといけないと思います。

学校間の差や下位の学力を上げるということに関してはなかなか難しいところがあると思います。

基本的に学級が機能してないというクラス、特に単級の学校とかにあれば、その時に、成績が大幅に下がると思います。具体的なことはここでは申せないでしょうけれども、やはりそういう傾向もあったと思いです。ですから、まずは授業を受けられるように、やる気のある子が特に授業を受けられるような体制を作るという意味では、教職員の充実といいますか。サポートできる体制が必要だと思います。

これは総合教育会議もしくは教育長なりのやはりお金の問題、マンパワーの問題ですから、そういうところは補充していただかないと、まずそのスタートが、授業自体が成立していなければ学力は伸ばしようにも伸ばせません。そうなったらもう極端なことを言えば、塾に頼るしかなくなります。ですから、まず公立の学校として成績上げようというのであれば、まず授業ができる体制を作るという、これがこの場でしかできないことだと私は思います。

あとはもう一つ成績が上がらない理由として、先生方だけの教え方だけなのかという、これも前の機会でも言ったことがあったと思いますが、やはり各家庭、地域の教育に対する考え方です。それは明らかに差があります。

町や市、滋賀県の中でも地域によって全然、親の教育に対する意識というものが違うと思います。具体的には教育に対するお金のかけ方、やはり親の働きかけというか、私は数年前にも言ったことがありますが、家庭が勉強させるつもりがない子どもに、そういう環境が作ってあげられない子どもに、「勉強頑張れ」とか「予習復習をやりましょう」と言うことはなかなか難しいです。やっぱ親の意識を市として全力で上げたいのであれば、私は一度「お子さんの学力を上げたいですか」と確認すべきだと思います。極端な話ですが。その結果どういうふうに親が皆考えているかです。「どうでもいい」や「就職できればいい」とか、最後が大学とかそういうところまで目指しているところもあれば、中高でその後は仕事をされる等、それぞれ目的が特別な技術を持てばいい等、いろいろな考え方が違うと思います。

ただこの学力テストは全部共通ですから、内容は同じ問題を解きますから、基礎学力というものをつけるためには、家庭の意識というのは一番大切だと思います。先生だけが頑張っていても、家庭がそういう意識がなければ子どもにもそういう気持ちというのは伝わって、学校内で授業に対して妨害とまでは言いませんがそういう行動を持つ可能性もあるし、そこまで直接的には聞けませんが、一度、今までとは違った観点でアンケート的な方法で教育委員会として親に対して発信するべきではないかと思います。どういう結果が出るかという確認です。大分前にも言ったことがあったと思いますが、これを私は希望いたします。

○本田委員

4月の校園長会議の時に、彦根市の学力向上推進プランをいただきましたが、そこに具体的な目標に、「全国学力・学習状況調査において調査結果がすべての教科で全国平均を上回ることができるようにする」と目標が挙がっています。

それには目標の達成のために授業力、家庭学習、学びの環境づくりを起点として挙げていて、教員たちの研修会・研究会を充実させようとか、それから、学習の習慣や意欲を持って

勉強しようという気持ちを持たせるような「具体的な取り組みをしよう」、「読書活動を充実させよう」、「互いを認め合う集団づくりをしましょう」、「家庭とか地域に積極的に呼びかけましょう」等、そういうことも全部明記されています。目標としては「点数が全国平均を上回ることができるようにする」ですが、それは過去問だけをしたらいいという問題ではなくて、先ほどから出ているような家庭への呼びかけや、先生の授業力の向上や教師が子どもたちにわかるような授業をしないといけないので、それが教師の仕事ですから、やはりそういう研鑽が必要ではないかと思っています。国語の記述式に無回答が多い、算数の問題が読み取れない等、最低限の国語の力がなかなか身についていないということは、とても衝撃的だと思いました。

今はやりの機器を使うのもいいですが、やはり昔から大事にされている読書等をこれまで以上にその関連を強化していかなくてはいけないと思います。算数や数学だけではなくて、好奇心を持って理科の実験をやったりしたら子どもはとても喜んで知識を広げたりします。そういう一つ一つのことを大事にするような授業づくりをして欲しいと思います。

この前ノーベル賞をもらった真鍋さんが「一生好奇心を持ち続けるためには、小さい頃の直接体験等をいっぱいさせるべきだ」とおっしゃっていました。

ですから、保幼小では非認知能力を十分育てるような教育課程も設けているわけですし、その年々に合ったような力を子どもたちにつけていく努力をプロとしてやっていかなくてはいけないと思いました。

それから、心育ての六か条がありますが、その視点の分析も私はとても興味深いと思っていました。皆さんが滋賀県の子どもは学力が下回っていると言っていますけど、滋賀県の子どもは後から伸びているという認識があって、確かに秋田や福井等、真面目でコツコツと全部やって親も何世代も一緒である等、環境に恵まれている子どももいますが、伸び伸びとそういう良さが彦根の子どもにはあるように思えてなりません。ですから、今の点数の話ももちろんですが、もっと追跡していくと面白いかなと思って見ていました。

○教育長

彦根市の教育委員会で、子どもたちの生きる力をつけていくための状況を確認する一つの指標として「学力・学習状況調査ですべての教科で全国平均を上回る」ということを指標として、これまでの教育の取り組みを評価しているわけですが、私の考えは、子どもたちにつけなければならないのは、何回も言っていますが、非認知能力を含めた生きる力としての総合的な学力、これも子どもたちにつけたい力と考えています。

なぜなら、例えばテストで点数を取るということだけを目標にして学校教育が行われるとすれば、それはこれから生きていく力として多様な人々と協力をしながら何かを創造していく力ということを身につけていく上で、テストだけに価値観を置くと、ひょっとしたら勝ち抜く力、受験競争に勝ち抜く力というのはそういう競い合いの力だけに価値を置くという考え方も生まれてくるのではないかということを危惧するわけです。

ですから、学校においては、今の授業改善を行っているわけですが、友達と共同して学ぶ学習、それから、一人ひとりの能力に合わせてきめ細かに指導を行う、一人ひとりに合った学び方で学ぶ、個別最適な学びと言われますけども、その二つをやっていかなければならないと考えています。

しかしながら、一つの指標として考えていますと全国学力・学習状況調査の結果において、全国平均を上回れなかったということは重く受けとめています。このことを踏まえまして、これから更に学校で子どもたちが主体的に学んでいくということを通して、子どもたちが自立した学習者として育ってくれる。それをまず目指して、これからの教育を進めていかなければならないと考えているところです。

○小松委員

歴代の教育長も、今、西嶋教育長が言われたような発言もありましたが、そうであれば、いわゆる生きる力の総合力をつけること、或いは個別最適な学びが重要ということがわかるような指標を作らないといけないと思います。

彦根市としては学力の点数が全国レベルでないということで、今でも、最近マスコミはあまり順位のことを言わなくなりましたが、今年いろいろ新聞を見たら、読売新聞は全国に滋賀県が何位か載せているわけです。そういう中で彦根市としての重要なところはこれではないと、しかし今、西嶋教育長が言われた二つの点については前年よりこれだけ伸びていますというような別の指標をつけて説明しないといけないと思います。毎年こんな学力テストの点数だけにこだわらないという教育長の思いがあったら、それは学校の先生もそう思ってしまいます。点数を上げようなんてしないです。私の考えは、点数はせめて全国の真ん中ぐらいにいってほしいと思っています。まずはある程度、評価されているのでしたら「平均で真ん中ぐらいまでいこう」と、ここは言うべきだと思います。必ず今西島教育長が言ったことは言われます。それであれば、その非認知能力や井伊直弼のところを皆にわかるように「非認知能力等を測る指標の結果がこれだけ良くなった。彦根の最重点はここです。全国学力テストの点数ではありません。」と。県の福永教育長も重く受けとめなくてもいいです。それだったら滋賀県の指標をつくればいいわけです。「全国の点数を上げないといけないけれども、全国の学力テストの点数だけにこだわる教育はおかしい。」というのはギャップがあります。二つできれば一番いいとは思いますが、私はそういう感じを持っています。

だから、それであれば別の指標をつけて、彦根はこれだけ良くなったというね。
点数だけでない部分の評価ができるように、それがなくて、いつも点数ばかりがこういうマスコミや新聞に出ますので、ついつい世間の人からも「何故滋賀県は低いのですか」と言われるわけです。

○永濵委員

今の西嶋教育長のご意見に対して小松委員が言われ、私もすべて否定するつもりはありませんが、教育長の言われる非認知能力を育てる教育で知識的なものも伸びていけば、これはバランスよくいいと思います。ただ、あくまで今のは理想だと思います。今、調査のテストだけを目的としているのでしたら、そんなことを話しているわけではなくて、これはあくまで一つの調査方法であって、私たち委員はそれだけだと言っているわけではありません。今のお答えであれば、何か私たちが、学力状況調査、もうそれですべて否定しているかのような教育長のコメントに、私は受け取れました。そういうふうに受け取れたから小松委員も先ほどのような意見が出たのだと思います。

私は正直言いまして、非認知能力の評価というのは、調査の中で自己評価だけで全部できるのかという正直疑問があります。自己評価だけですべて実際を評価できるものでしょうか。それがいつも疑問です。

やる気があるというのは自分の意思になりますが、実際粘り強くできているかは他者が評価しないといけないところも多々あると思います。ですから、この調査自体、信用していないと言ったら失礼ですけど、正確ではないのではないかと思っております。

時代によって競い合いという教育の時代もはっきりとありました。時代によって変わっていくといけないし、でも社会に出たときには、人間誰も競争社会に出て行くわけで、そういうものを一部教えないといけないと思います。やはり競い合いは大事だと思います。かけっこでも順番つけない等いろいろありますが、それも時代が変わったから私たちは言うべきではないかなと思いながらも、疑問符は常についております。

西嶋教育長も滋賀県の教育長も数年前に言われたような近いようなところを言われたので、私は正直唖然としました。今まで「上げましょう」ということで、教育委員会の中でも、会議や調査結果を私たちは聞いてきました。ただこの調査だけがすべてだとは言いません。しかし、この総合教育会議の場でそういうふうに言われると、「今までの会議は何だったのか。今まで私たちが考えてきたことは何だったのか」ということを考えてしまいます。それぐらい衝撃的な一言でした。

これに関して市長から一言お願いいたします。

○市長

ありがとうございます。

私の考えとしては「この点数だけで測れることもない」という言い方で、「学力テストぐらいはこなせる子を育てたい」というようなことを以前言ったことがあって、やはりニュアンスとしてはそうです。私はそういう意味で点数を重視しないというだけでただ、私は、やはり非認知能力を含め、もし、しっかりとそういう能力が身についていたら学力テストは上がっているはずなので、結果として上げたいし、そこは一つの指標だと思います。

非認知能力が上がれば、学力テストも上がってくるはずですので、これぐらいと言うとま

た怒られますが、これぐらいはしっかりとこなせる子どもを育てていきたいので、あくまで一つの指標ですが、十分非認知能力を測る上でも、総合的に能力が上がれば、好奇心をもって何かしら自分から向上心を持って取り組めば、国語・算数・数学もおのずと少なくとも全国平均ぐらいはいけるはずなので、そのぐらいはこなしていただける子どもを育てるように、ぜひ取り組んでいきたいと思います。

あと、今、永濵委員とのお話を聞いていて思うのは、やっぱり今ここで話していて、教育長に言って、その後に校長に言って頂いて、生徒に伝わる現場までに消えてしまっているというか、伝わりにくいし、組織として例えばこの学力テストの向上の取り組みをここで話し合って本当に末端の教師のところまで浸透しているのか、先ほどおっしゃった「まず全員が解く」ということはとても大事だし、出来ればそうしたいと思いますが、本当にそこまで行き渡るのかというのは、この教育大綱をつくりながら少し疑問な部分があります。

私が新しい取り組みをしたいなと思うことは、毎月 1 授業、もう学期に一回では少ないので、毎月 1 授業でもいいので、もう今タブレットが行き渡っているので、直接 DVD でもいいので、例えば私が 4 月に話しますというようなものや、お医者さんの立場でお話いただく等いろいろな先生以外の人の社会に出ている人の話を一授業聞いて、それで各分野での活躍の仕方ということを紹介しながら、向上心というか、「勉強は実はすごく大事なんだよ」というような話を皆さんにしていただいて、直に小中学生に届くような内容もしなくてはいけないのかなと思っています。担任の先生にして頂く取り組みと同時に、そういう我々やスペシャリストの講師が直接、小中学生に勉強ではなくてやる気を伝えるような取り組み、向上心を涵養するような取り組みができると、少し違ってくるかと思います。

それと、これも皆さんの意見を聞いていて思ったのですが、永濵先生がおっしゃったように、もう一年生からスタートしているというところで、一つの区切りとしてまず、大体以前だと 5 年ぐらいの区切っていたのですが、6 年や中学校の単位で考えて 3 年で、何かしっかりと一点全力で取り組んでいって、それを評価してもう一回やるというような、学力テストに関してそれをしたいと思います。例えば、先生がおっしゃったようにまず、3 年間全員の先生が学力テストの問題を解くということを徹底してやってみて、それで評価するとか、そういう取り組み、単年度でやって駄目でした、昨年度も駄目でしたというのを繰り返してきているのが実態のようですので、スパンが 5 年となると忘れてしまうかもしれないので、3 年ぐらいをめどに徹底的に何かについて、失敗を恐れずに取り組めることができたらなと、そうすると少なくとも中学校では測れます。中学校 1 年生から 3 年生まではその取り組みの結果が出るので、3 年前との評価というのは出せると思いますし、小 6 でも小 3 から取り組んでいて、どう変わったかという取り組みができると思うので、単年度ではなくもう少し中期の取り組みで、何か集中的に、もちろんそれは非認知能力の向上についてでもいいのですが、指標として小松委員がおっしゃっていただいたように測れる何かを取り組みでしていきたいと思います。

いずれにせよ、私は結果的に学力・学習状況調査の結果は向上しなければいけないし、そ

ういう他の能力の向上がこの数値に現れてくるものだと思いますので、そういう意味での教育大綱を皆さんとつくっていければなと考えております。

○小松委員

教育長、先月も少しお話しましたが、学ぶ力向上滋賀プランというものを滋賀県の教育委員会が出していますが、これの推進体制というのが最後にあります。

以前、この学力テストについては、福井県や秋田県は、それぞれ地域の大学が入って、この分析を教育学部が中心にやっているというのは、一応オープンにはされていますが何をやっているかまでは詳しく公表されていませんが、滋賀県でもやっているとこの前お聞きしました。私はやっていないと思っていたので、それであれば何でこういうところに挙がってこないのかなと思いました。

情報が漏れたらセキュリティーの問題がある等言われていましたが、やはりこれで見たら、市の教育委員会と学校関係でやりますということですが、今言っている分析とか評価というのは、他の県がやっているように、もう堂々と滋賀大学の教育学部とやっていますと言って何が問題なのかと感じています。分析を私はやるべきだと思います。それをやっているのであれば、こういう場で堂々とやっていると出せばいいと思います。

なかなか先ほどの本田先生の中で、何が足りないのかがわからないとありましたが、もう中だけでやっていてもこれはわからないと思います。外のそういう見方というものをもし入れられるのだったらそれがどういうことなのかというのを知りたいし、もっとオープンにすべきではないかと思います。

教育長、その点についてはどうですか。

○教育長

滋賀県は学ぶ力向上と言っていますが、このことについて県内の大学との連携はやられています。

今はその学力・学習状況調査について、その研究機関等とデータを使って分析をして、それについて公表するということが、環境整備されてきていますけども、個人のデータの取り扱いについては、これまでは非常に制限がありまして、その結果そのものをオープンにするということはできませんでした。特に細かな内容について公表はしていませんが、県の施策として学ぶ力を向上するためのポイントとして、読み解く力を高めていくというところで県はこれまでの分析結果を施策にも反映させているということだと思います。

その読み解く力というのは、例えば国語の問題でも算数の問題でもそうですが、複数の資料や情報から自分の考えを確かにしていく力がこれまでから弱いということもありましたので、単にその読解力ということでなくて、そういう複数の資料から読み取って考えをまとめる力であるとか、またそれに加えて友達との対話や表情等も含めて、その対話を通して学びを深めていく、そういう力をつけていくことが滋賀県の子どもにとって必要というとこ

ろで、読み解く力の向上という施策に大学との共同の研究の中でそのことを施策として打ち出したと理解をしています。

それから他のこともよろしいですか。

今、少し誤解があったかと思いますが、説明させていただきますと、永濵委員から、点数のことについてご意見をいただいたわけですが、結局、その点数を上げるということを否定しているということではなくて、子どもたちの生きる力の向上を何で見るかという一つの指標として、この学力・学習状況調査の教科問題のテストの点数とこれを全国平均まで持っていくということを目標にしていますので、それは子どもたちについた力を測る上で非常に重要なものであると考えています。

私が言いたいのは、点数だけが子どもたちの生きる力を測るものではないと考えていますということです。ですから、点数が上がったこと下がったことだけをもって子どもたちの力のすべてを表しているものではないということですので、小松委員もおっしゃいましたが、それらの非認知能力を測るための指標がいるのではないかということで、それはその通りだと思っています。

非認知能力を測るための手段として、これも学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査になるわけですが、これについての肯定的な回答の変化を見ながら、その非認知能力の伸びを測ろうということで、今、お手元にあるような資料としてまとめているということでございます。また、この資料から危惧しますのは、先ほど市長もおっしゃいましたが、小学校で肯定的な評価が、全国値とほぼ同じ値やそれを上回っているにもかかわらず、中学校においては全国県よりも低く肯定的な回答の率が下がっているものがあります。

こういう結果を見ますと、例えば今、彦根市で目指している生きる力の向上のための子どもたちの主体的な学びということが本当にできているのだろうかということを私は危機感を持っています。

子どもたちに、ひょっとしたら子ども主体ではなくて教師主体の授業をして詰め込みの教育をやっているのではないかと危惧するわけです。あくまで集団が違いますので、同じ集団をずっと経年で追っているわけではないので、今の小学校 6 年生と中学校 3 年生の集団の状況ということになるわけですが、これを小と中を比較するということに意味があるのかどうかわかりません。この結果から見ると、中学校においては全国の平均よりも非認知能力に関わるところでかなり差があるということから見ますと、子どもたちが本当に興味関心があることに主体的にも学びを広げて深めていくという活動が本当にできているのだろうかということを、私は課題と捉えて、これからの教育活動を進めていく必要があるのではないかと思います。

〇永濵委員

教育長、ありがとうございます。先ほどの小松委員のことに対してご回答頂いたと思いますが、この会議は学力・学習状況調査についてということです。主観がそこです。

何かいろいろと範囲が教育全体の話にまで広まっているような気がします。そうではなくて、学力・学習状況調査をどうするかということを主観におけば、やはり上げるべきだということを私たちは言っているわけであって、他のことまでは大きくは言っていませんので、そこも逆に誤解しないでいただきたいです。

あくまでこれ題名は学力・習状況調査の話です。それを上げるべきなのかどうか、上げるにはどうしたらいいのか等、そういうことです。ですから、それを前提に話しているのですから、何か話が非常に大きな題目になってしまって、確かに私も一部非認知能力の話とかしましたが、そこまで広がるととても 2 時間で終わるようなことではもちろんないと思います。ですから、まず上げるべきなのかどうかということと、上げるために何をすべきなのかということを言っているわけです。そこで、点数だけではとか言われたら、何か途中で止まったように私は感じたので、そこはもうお話として介入して言わせていただきました。

それと、彦根市の井伊直弼になぞって、子どもたちの生徒質問紙がありますが、これは質問総数としては何項目あるのですか。私が見てきたらよかったのですが、すみません。その中でこれを取り上げたというのがごく一部のデータであって、私は前も言いましたが、すべてのことに関しての情報で見ないと何とも言えません。ピックアップしたのは先生方でしょうけれども、先ほど教育長もおっしゃっていましたが、これは今現在の小 6・中 3 ですから、同じ質問に対して、3 年前の中 3 と比べないといけないわけです。ですから、これは市長も心配されていたように、3 年でなぜ中学に入って下がるのかというのは結果とはダイレクトには違うのかなと思います。彼らの中 3 の 3 年前の質問と比べるのだったらわかるのですが。

〇本田委員

今の話とは関係ないかもわかりませんが、そもそも 7 年前にこの全国学力・学習状況調査が導入された時、一番何が問題だったというと、子どもがどんなところでつまずいてどんなことができるようになったかを大人が知って授業の改善等に役立てるために、そして国の方にある指導要領でこれだけのことをこの学年にきちんと理解してもらうよう努力する等そういう基準があると思いますが、そこがどこまで改善する余地があるのか等、本当にその指標のための導入だったと思っています。

だから個々の表が子どもたちに渡される時に、「ここがちょっと弱かったね、次の時はここをこうしようね」といろいろなアドバイスに使ったり等、子ども一人ひとりの理解をどこまで深めているかが大事であって、子どもも点数は高い方がとても喜びます。私たちもそういう時代に育ったからですが、1 点でも多くなったら何か嬉しくて家に帰って「点数上がったよ」と言って、喜んだりしたものですが、私は今の子どももやはりそれで喜びます。ただそれだけではなくて、日々の努力とか点数には出なかったけれども頑張ったねとか、思いやりのある行動を認められたときも同じように喜びます。あまりテストの点数を結びつけると却って誤ったメッセージになる子どもも中にはいて、「私どうせできん子やもん」のよう

に自己肯定感を失くしてしまうような子どもにしてはいけないと思うので、点数は上げてせめて全国平均にとは思いますが、その誤ったメッセージにはならないように子どもたちに伝えて欲しいなとは思います。

それから、小さな学校で誰かが 100 点、誰かが 0 点とったら、平均点は 50 点です。50 点と 50 点の場合でも平均は 50 点です。全国の傾向とか見る時に平均点は必要かもしれませんが、学校では、平均点よりもその子がどれだけ伸びたか、これを伸ばし切れなかった、どうしたらいいのか等、そこに話を持っていくことが私はその子のためにも教師の力のためにも家庭への働きかけのためにも大事だと思います。

ですから、プランにも示されているように、その子ども一人ひとりに力をつけるためにどうしたらいいのかをこれからも考えていかなくてはいけないと思います。

○市長

時間が押して申し訳ないですが、一つ確認させていただけますか。このデータの取り扱いで、今、県と全国と合わせて彦根市というデータが出ていますが、これは外に出してない数字ですか。出してもいいのですか。

○学校教育課長

はい。このデータにつきましては、市のホームページにも、このグラフを挙げさせてもらっておりますので、この場だけという数字ではございません。

○市長

ということであれば彦根市は、例えば滋賀県で一番だということを何らかの形として言ってそれをＰＲしていいのですか。

例えば我々が目指している移住政策の方で、例えば「滋賀県で学力テストは一番ですよ」ということを対外的に言ってもいいものなのかだけ教えて頂きたいです。

○学校教育課長

1 番か 2 番かということは、例えば県で、県内で 1 番 2 番というのは、他市の状況がわからないので、滋賀県と比べて高いとか、また全国の数字として各県は出ていますので、その数字に合わせて「一位と同じ点数です」「平均点です」ということは言えるかもしれません。よろしいでしょうか。

○市長

はい。では、順位は言えないということですね。「県平均を上回っている」というのが言える程度とか或いは「全国的にも上回っている」というのは言える範囲なのですね。

○学校教育課長
　はい。

○市長
　もう 1 点確認で、先ほどの話ですが、学校別というのは当然非常に扱いにくいデータではあるのですが、でも実際の指導の分野で出て来ているのですか。例えばこの学校が極端に低いとか、それを公表せよと言っているのではありません。そのデータは持っておられるかどうかです。

○学校教育課長
　はい。市教育委員会としましては、各校の状況については平均点として掴んでおりますので、各校の状況はわかります。

○市長
　今まで極端に低い学校に「かなり低いよ」等、そういうことは言われたことはありますか。

○学校教育課長
　例えば市内でどこが一番低い点数とかそんなことは当然申しませんが「市の平均と比べてこういう状況ですね」というような話で指導させてもらったことはございます。

○市長
　やはり競争原理を働かそうということではありませんが一定効果を上げようと思うと、小松委員もおっしゃったように私もそう思うので、やはりそこを改善していかないと上がらないので、そこはやはり言っていただかないと、もし極端に低いところがあったら全体で下がってしまいますので、今ここでそういう公表を求めているわけではありませんが、そこはお願いしたいと思います。ありがとうございます。

○企画課長
　それでは、一時間と少し経ちましたので、ここで休憩を挟ませていただきたいと思います。5 分程度ということで、よろしくお願いいたします。

休憩

○企画課長
　それでは再開をさせていただきたいと思います。
　一つ目の議題で全国学力・学習状況調査の結果ということでご議論いただきまして、たく

さんの貴重なご意見いただきました。

次の議題もございますので、本件にご発言がなかった田附委員から発表いただいた後、市長に最後締めていただいて、一旦一つの議題を終わらせていただくという形で進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○田附委員

私も5年前まではいろいろな中学校を回っておりましたし、今は幼児の保育園、幼稚園、こども園に行っておりますので、子どもたちの様子を見ていますと、今の学習ということは、幼児期から子どもたちに身につけていくというか、勉強が楽しいなという意欲を子どもたちにつけてやるということがとても大事ではないかと思います。幼稚園や保育園に行っていますと、子どもたちがとてもやる気まんまんで本当にキラキラ目を輝かしながら、いろんな指導しても聞いてくれています。中学校では、中学生の勉強のわからない子と話していると「小学校3年生ぐらいからわからなくなってきた」と言っている子がいました。幼稚園・保育園の幼児期から小学校に行く時も、ずっと幼稚園・保育園は遊びの中で勉強して学ぶというスタイルなので、小学校行ったらいきなり授業がありますが、その辺がスムーズにいけるような体制も大事なのではないかと思います。

私も中学校へ行ってから、絶対小学校から教科担任制を少し入れて欲しいと思っていて、今丁度入れてくださっている学校もあるということで、これはいいことだなと思っています。

幼児期にいろいろな図鑑等を見て非常によく知っていることもあるし、自分の興味があることは自分から勉強しようと思うので、そういう心を育ててやることが小さい時から大事だと思いまして、小学校に入ったらいきなり勉強というものがあるので、その辺も5歳ぐらいから年長になったら少し勉強方式みたいな「勉強ってこんなんだよ」という感じで小学校に繋げるようなことをしていただけると子どもたちも安心して小学校にいけるかなと思います。でも、子どもたちも小学校行けることを大変楽しみにしていますのでいいなと思いますが、その辺が小学校に入ってみたらそんなに難しいなというように思わせないように、少しずつ小学校の雰囲気を味わせてあげることもしていくといいのかなと感じております。

○市長

田附委員、ありがとうございます。

本当に幼保小の連携というのを今回しっかりと教育大綱に盛り込んで、取り込んで参りたいと思います。

やる気のある子どもを育てることが非常に重要で、まだまだ議論はつきませんが、もう我々自身がしっかりと向上心を持って取り組んでいって、それで子どもたちに伝わるよう

今後、教育大綱を作っていきたいと思います。そしてこの学力テストが結果的に上がるような方向、長期ビジョン・中期ビジョンをしっかりと立てて、毎年の繰り返しにならないように明瞭な個別具体的な政策を実行していきたいと思います。

今日はちょっと時間も参りましたので今後の課題にさせていただいて、しっかりと取り組ませていただきますので、これをもって次の議題の方に移らせていただきたいと思います。ありがとうございます。

○企画課長

ありがとうございました。

それでは、次の議題の方では令和 4 年度予算につきまして説明させて頂きたいと思います。教育長からよろしくお願いいたします。

○教育長

令和 4 年度予算に関わって、教育委員会としての考え方を先に述べさせていただきます。

変化が激しく先行きが不透明な未来社会を子どもたちが社会に出たときに生き抜いていく力をつけていくためには、学校を離れてからも自立して学び続ける学習者であることが必要だと考えています。そのために令和 4 年度の目標としまして、学校において社会に開かれた教育課程の実現、これは彦根らしい学びの追及ということを目標として取り組みを進めていきたいと考えています。

簡単に社会に開かれた教育課程について説明させていただきますと、よりよい学校教育を通してよりよい社会をつくるという目標を、学校と社会とが共有して連携・協働しながら、子どもたちに力をつけていくという考え方になります。

ですから、学校教育を学校の中だけで行うのではなくて、地域の人的、物的資源を活用させていただくことで、子どもたちが社会との繋がりを実感しながら必要な力をつけていくという考え方でございます。

次ですが、令和 4 年度の重点取り組みとしまして、先の社会に開かれた教育課程の実現、彦根らしい学びの追求の実現に向けまして、6 点の重点を挙げています。

まず 1 点目が、「with コロナを踏まえた教育行政の推進」です。まだこれからコロナとの戦い、つき合いは続くと思いますので、コロナが拡大した時にも学びを止めないというための取り組みをする必要があると考えていますので、主なものを 3 点挙げさせていただいています。

2 点目ですが、「いじめを許さない安全で安心な学校づくり」で、子どもたちの力を伸ばしていくためには、子どもたちが安全でかつ安心な環境で過ごすことがまずベースになると思います。

そのために子どもの成長につなげるための安全で安心な学校づくりということで、そこに挙げておりますが、2 点を中心に施策を進めていく必要があると考えております。

続いて 3 点目ですが、「非認知能力を含めた生きる力としての総合的な学力の向上」で、これからの時代に基盤となる力として、国の方で言っていますが、言語能力、情報活用能力、それと問題発見解決能力になります。

私はこれに合わせて非認知能力を育成するということが必要だと考えておりますが、そのためには、子どもが主体的に学ぶという経験が必要であると思います。また、彦根の歴史や文化、自然と彦根での素材を使った学びということで、彦根らしい学びを追求していくことが彦根に愛着を持つ人を育てていくことにも繋がると考えています。

これらの考えを踏まえまして、子ども主体の授業への転換と、それから本市の歴史文化偉人とテーマとする課題解決探求型学習の推進をする実現したいと考えています。

続いて 4 点目ですが、「社会教育の充実によりまして、家庭、地域の教育力を高める」ということが、結果として学校教育の充実に繋がると考えていますので、生涯を通じた学びや活躍の場づくりに努めたいと思います。そのために主に 4 点を挙げさしていただいております。

それから、5 点目ですが「教育は人なり」ということで、教育の質の向上というのは、極論を言えば教員にかかっていると思います。その教員が現状では超過勤務の縮減ということがなかなか実現できない状況でありますので、充実して働き続ける教職員の働き方改革に向けた取り組みを進めていきたいと思います。

それから最後 6 点目ですが「ＧＩＧＡスクール構想の推進」で、教育のデジタルトランスフォーメーションも進めまして、上に掲げたことはもちろんですが、子どもの学び方改革と教員の働き方改革を実現することに努めていきたいと考えています。

以上 6 点が令和 4 年度の予算の重点取り組みとして挙げさせていただきました。

○企画課長

ただいまの令和 4 年度予算方針につきまして、ご意見を頂戴できたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○小松委員

3 点、中身についての思いだけ言わせてもらいます。

すべてが大事な項目ではあるとは思いますが 1 点目は、総合的な学力の向上のところですが、先ほどの議題 1 でもありましたように総合的な学力の向上を何で評価するのかという評価シートとともに、認知能力、この学力の向上を上げていくということが目的としてありますが、これを達成するためにいつも予算ということになりますと支援員をはじめ人員の増加の要求が出てきていると思います。なかなか人を採用するということは、費用面でも採用すれば辞めさせるわけにいかないので、必要ところはあると思いますが、その中身として、学力調査の時にも言ったように彦根市独自の評価方法や学力向上のためのテストの実施等に対する予算の使い方も考えて欲しいということです。

2つ目は、彦根市サイエンスプロジェクトが以前ありましたが、ロボットや理科離れを話す等、その地域の人との一体感、それが前市長のときに大幅に削減されて今はほとんどない状態ですが、そういうようなことも含めて、人の増員とともに活動の中身も見直していくべきではないかということが1点目です。

それと 2 点目は教員の働き方改革、これもいろいろなサポートスタッフを入れる等いつも人員の増員というのがあると思いますが、私は教員のレベルアップは要ると思います。ここずっと教員に対する研修費が少ないのではないかと言っていますが、大体年間で20万とか30万だったと思います。これはどうしてかと聞いたら「滋賀県の研修所があり、そこできちんとやっています。」と言われていますが、ほとんどそれ以外に先生の研修はやっていないのではないかと、逆に言ったら、そういう研修のメニューを考える人がいないからお金もいらないということだと思いますが、やはりその先生の研修についてはもっと何をしないといけないかを考えるときが来ていると思います。ここの費用というのは少し見直す必要があると思っています。

二つ目は、働き方改革は結構民間は進んでいると思います。先ほど市長が民間の人に来てもらっていろいろな授業をしてもらったらどうかという話がありましたが、私もそう思います。先生に対しての民間企業への派遣等もあったと思いますが、学校以外の厳しさとか常識等を知ってもらうことは先生の意識を変えます。ですから、人を増やすこと以外にまず先生の意識を変えることが大事なので、企業の人事の人にでも来てもらって講演してもらう等でもいいと思いますが、ぜひそういうところの中身のメニューをまず考えてほしいと思います。

最後に 3 点目は、いじめを許さない安全な学校ということで、先月 1 年間のいじめの件数をいじめ担当から聞きましたが、彦根市は全国と滋賀県から比べても圧倒的に少ない。私は何か評価が違うのではないかと質問したのですが、いつも彦根市の細かいことを調査してくれています。評価の仕方は変わりませんが、いじめという部分については非常に少ないという印象を受けております。これは多分、塚本課長が毎月私たちに報告してくれていますが、細かな活動が効いているのではないかと思います。ここのところは継続して、ぜひその予算も見ていただいて、そういう継続した活動が必要ではないかと感じました。

以上、前の中身について重点として私が思ったのはこの3点です。

○本田委員

教育長や小松委員の話を聞いて思いましたが、やはり安全・安心、ここに帰するという気がします。コロナ禍での学びの質はもちろんですが、いじめとか不登校や虐待等、学校が楽しいと子どもたちも思えるような環境を整えることが大切だと思います。楽しいということは自分も成長できるし勉強もわかる等、そういうことに繋がると思います。

教師も力をつけなくてはいけないのはもちろんですが、例えば小 1 すこやか支援員さん

や読書活動の支援員さん等、マンパワーを潤してあげることによって、学校という社会の中で子どもたちがいろいろな人と関わって社会性を身につけるところもありますし、だから担任だけではなくて、学校の中で子どもたちをいろいろな目で見てくれるスタッフがたくさんいたらありがたいと思っています。

それから理科のアシスタントも全部を免許を取って、しなくてはいけないという場合もあると思いますが、アシスタントがいるといないとでは理科の授業の充実度が違うことも言えると思いますので、そういう部分はたくさん人を入れて欲しいと思っています。

中学校の方でもスポーツのエキスパート等を取り入れてできるだけ専門性を子どもたちに伝えるという取り組みも大事だと思いますので、そういうところは充実させて欲しいなと思います。

それから全部に関わってきますが、家庭教育が低下していることは多分みんな感じていると思います。それは親だけの責任ではなくて周りとの関わり等、そういう今の時代を映していると思いますが、家庭教育支援事業も重要です。いろんな方面から将来の彦根を背負う子どもたちへの投資のつもりで予算を使っていただけると本当にありがたいと思います。

最後に、博物館は、子どもたちの誇りである彦根城をシンボルとした彦根の文化や自然を大事にしていかなくてはいけないと思いますので、博物館はより子どもたちにも活用してもらえるような、もちろん今までも出前講座とかいろいろやってくださっていますが、文化の拠点として浸透させていきたいものだと思います。

○永濵委員

教育長からのご説明で、確かにすべて必要ではあると思いますので、ただこの会議としての話かもしれませんが、やはり財政があると思います。教育委員会の総合教育会議の場でも、大人の会話として、会議としてはやはりお金のことは重要だと思うので、どこまで出していただけるのか、どこまで聞いていただけるか、どこまで重要視していただけるのかというのが重要で、この項目に関しては、半分この場はお願いの場ではあるかと思います。

私もすべて確かに必要だと思います。しかし私は先ほどから言っていますように、やはりマンパワーです。試験という結果も一つの結果ですが、学校に行く行かない、いじめ等もありましたが、不登校の課題です。行かなければなかなか教育の機会を得られません。不登校の子が少し彦根市は他の市町村と比べても全国的にも多かった気がします。そういう点からもそうさせないための学校での見守る体制、そういう意味でも教育に対する補助的なサポートの人員も必要ですが、子ども間でのトラブル等にいち早く対応できるような人員の配置がまず根本に必要だと私個人は思っています。それをすることによって、今の様々な問題が軽減される可能性があると思います。

○市長

ありがとうございます。

本当に優先順位、甲乙をつけがたいということでも、ここもまず2点目はもう筆頭です。私の中で、旭川のような事例があってはもう絶対いけない。いじめを許さないというのが大事で、いじめを認めないといけない。結果的にいじめはなかったなんて言っていたらまさに旭川の事例なので、いじめを許さないという姿勢を貫いていただきたいです。あんなことはもう絶対に許さないので、私は知らなかったということ自体がもう許さないので、必ず把握していただきたいと思います。もう一つ言えば、例えば、いろいろな政策を進めるにあたっても、少し前や今もそうですが「えっ、滋賀なの。滋賀県て大津のいじめで有名なところですね。」とまだ10年経っても皆さん、覚えておられます。もうこれでは移住もしてもらえない、そんなことがあった日には、他の政策プランも進まないぐらい重要な問題なので絶対にこれは許さないということを、永濵委員がおっしゃったマンパワーのことで解決できる部分はしっかりとして解決して、不登校児の問題にも取り組んでいきたいと思います。そこは私の中では重点であり、永濵委員のおっしゃる通り根本だと思います。そこがスタート地点だと思いますので、取り組ませていただきたいと思います。

あと、彦根市が世界遺産登録を目指している中でもありますが、この彦根としてのブランディングや誇り・プライドをしっかりと醸成して、それをベースにこの教育大綱も進めていきたいと思いますので、3点目の2行目にあります本市の歴史文化、ここで本当に彦根に生まれた誇りを持っていただく。先日も東京の方に要望に行って、皆で桜田門へ行って浸っていたところですが、いろいろな意味で井伊直弼は本当は偉人だったということを含めて、歴史の教科書そのままである必要もないと思いますし、いろいろな他の文化・歴史でも自然環境でも彦根というものに誇りを持っていただいきたいと思います。

今日、観光協会のある方とお話していて、他府県の方が「彦根東高校の生徒は観光客にすごく挨拶をしっかりとする。それがとてもよかった。」とおっしゃっていただいたそうで、それはもうまさに私はおもてなしだと思います。しっかりと挨拶を出来るというところはベースとして、地域に誇りを持っていて、例えば彦根東高等学校の子が挨拶をして「どこがご飯おいしいの、どこが見所か」というところもまた答えられるというのも、いろいろな向上心や自分から学ぼうという姿勢にも繋がるところでありますので、今さらかもしれませんが、挨拶運動的なものを現在風にアレンジできないかと思います。

実際、この市役所からまず正さないといけないと思っています。実際私が 2 階を歩いていても皆素通りです。2階を歩いたら皆、素通りで、全く顔が立ちません。4階はさすがにだいたい覚えてもらいましたが、そういうところがありますので、それが市長にどうこうではなく、一般の市民の方でも来られたら挨拶するおもてなしは企業だったら当然です。証券会社、銀行で無視して素通りしていたら、もう二度とこんなところに来るかとなりますので、やはりサービス業ということでしたら、挨拶ぐらいはこの市役所からスタートしたいと思っているところでございますので、また教育の分野でも、そうやって本当に心から挨拶していく彦根、プライド、彦根の市民として誇りを持つ小中学生、見たらしっかり挨拶して彦根市民として誇りのある子に育ってもらいたいと個人的に思いますので、予算というよりは

内容の教育は方針にはなろうかと思いますが、その辺を重点的に取り組ませていただきたいと考えております。

○田附委員
　学校保健管理のところで、健康診断等の検診のことで予算をとございますが、もう少し詳しくどのような内容なのか教えていただきたいと思います。

○学校教育課長
　学校保健安全法に則り、健康診断で子どもたちの心臓検診等の検診が今のコロナ禍の中で大変時間もかかるようになってしまったり、また検査器具の消毒であったりというところが以前と比べるとかなり費用的にも上がっていることがありますし、同じことをやっていても今までのペースのままでいけなくて処理することも増えていることもあって、この学校保健管理に関わりましては、一つは今申し上げた健診が確実に行えるような予算立てと併せて、学校教育管理になりますが、事務量が今申し上げたような形も含めて増えております。コロナ禍の今後の先行きは見えませんが、現段階では、収まってきている中でも十分な感染症対策をしなければなりませんので、そのことに関わって事務量の増大によりまして、併せて課内の事務職員も十分配置できる形でお願いしたいと考えております。

○田附委員
　ありがとうございます。

○小松委員
　教育長、先ほど言った民間企業と学校との連携や働き方改革等の場合もあると思いますが、こういうことの活動は学校ごとにはやっておられるのですか。例えば、鳥居本は何かフジテックと地域のいろんなことと協定することをやっていたと思いますが、フジテック等は結構進んでいますから、そういうところでフジテックの社員が学校に来て、人との教育や先生方に対して働き方改革のようなことを、ほとんど無料でやってもらえるはずです。彦根で言ったらフジテックとマルホです。そういう活動というものは、一生懸命働き方で何かいろいろ人の支援を入れる等もありますが、そのあたりはどうなのですか。

○教育長
　企業の方々に学校教育に参加をしていただくということは、これからどんどん進めていかないといけないと思っています。
　なぜかというと、学校はなかなか変わらない価値観があるような一面もあるので、他の人が学校の教育活動に参画してもらう。地域の方もちろんですが、企業の方についてもこれからどんどん入っていただくようにしたいと希望をします。

それで、小松委員の質問の働き方改革について企業の方に講義をしてもらうことは、例えば教員研修の講師として招いて働き方改革としてお話いただくというようなことは可能ですし、また市の教育委員会でも働き方改革推進委員会を組織しています、学校の管理職や市教委の幹部等が入っている委員会ですが、そういうところで今後の働き方改革の取り組みについて話していただくことも考えられるかと思います。

○永濵委員

今の働き方改革というものも、うちの近くに小学校がありますが、確かに最近帰られる時間は早くなったかと思います。日によっては遅くまで電灯が点いていますが、だいたい平均して早く電灯が日消えている印象を受けております。以前とは違うと私自身は思っています。おられないだけでご自宅に宿題として持って帰っておられる先生もおられるかもしれませんが、これはわかりませんけれども。ということで進んでいることを願っております。

小松委員が言われました企業からの講演等も重要だと思いますが、実際見るのが一番だと思います。現場を見ることです。いくら講演でそのことを言われたとしても、現場のその雰囲気を見ること、これがもう一番だと思います。一般の企業の雰囲気は、教職員の先生方は卒業されてすぐ学校の世界だけとなっていると思います。研修でそういう項目はあるかもしれませんし、全員は無理かもしれませんが、出来る限り長期休暇の間の数日でも一般の企業に研修等、そういうところに行くことや見ることが私は一番大事だと思います。

勉強しているだけでは、実際、実験等そういうものを見てその状況を見て理解できるということが多々あると思います。子どもの勉強と同じで、大人も勉強です。体感しないとわからないと思います。その現場がどういうふうにして働き方改革しているのか、どういうふうに無駄な時間を削って等を直に見るということを強く教職員の研修の一つに入れていただきたいと思います。

○学校教育課長

以前から民間派遣研修ということで、県の事業ですが、3ヶ月間、企業に入って実地もしながらいろいろなことを学びます。実際それを持ち帰ってまた伝達講習という形で伝えてもらったりしています。具体的に申しますと、東近江市にあるコクヨさんに行った先生の話を聞いていると、5S運動ということで整理整頓から始まって、学校現場ではなかなか学べないいろいろなことを学べたということもあり、毎年のようにそういうところに行って研修していただいているところです。

○企画課長

そろそろもう時間も近くなってございますが、委員の皆様、何か最後にございましたら、お願いいたします。

発言なし

〇企画課長

では、本日いろいろとご意見いただきまして、本当にありがとうございました。

最後に市長から何かコメントがございましたらお願いしたいと思います。

〇市長

ありがとうございました。

本当に毎回、目からうろこというか、本当に勉強になることばかりです。私自身が、まだまだ好奇心を持って向上心を持って取り組まなければいけないなと反省しながら、本日頂いたご意見をしっかりと反映させていただきたいと思います。予算の方もそのようなメリハリをつけてしっかりと取り組ませていただきたいと思います。

いずれも重要なことばかりで、しっかりと咀嚼して参りたいと思いますので、また引き続きよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

〇企画課長

ありがとうございました。

最後に事務局からの連絡事項でございますが、次回の総合教育会議は 11 月 26 日に開催の予定をさせていただいております。

議題に関しましては、教育大綱の策定ということで考えております。また会場については特別応接室から変更になり、市役所 5 階の 5-1,5-2 会議室となっておりますので、その際にはお間違えの無いようよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして令和 3 年度第 3 回彦根市総合教育会議を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。